

「歌聖磯丸の足跡」

糟谷磯丸は、明和五年（一七六四）伊良湖の貧しい村の漁師の家に生まれた。三十歳を過ぎて父を亡くした後、病気の母親の回復を願い、三年間毎日、伊良湖明神にお参りに出かけた。その時、伊良湖明神に参詣する人たちが歌を詠むのを聞いて、和歌に興味を持ち、文字は書けなくとも歌を詠みはじめた。その才能を認める人たちの世話で、文字を覚え、歌の才を磨き、漁夫歌人として知られるようになっていった。

磯丸はまじない歌の作者としても有名で、民間ではむしろこの方面で知られていたかもしれない。東栄町では、数種の掛け軸や棟札に記されたまじない歌が確認されている。その内容は家内安全、病治療、防火などである。



伊良湖神社境内の磯丸霊神の祠

磯丸没後、磯丸を慕う人々は神として祀ることを神祇官に願い出、正式に認められた。今も伊良湖神社の境内に「磯丸霊神」として祀られている。

文化十四年三月十一日、五十四歳の磯丸は、母親の菩提のため信濃善光寺詣での旅に出た。豊川稲荷や鳳来寺などに詣でながらの旅であるが、十五日には現設楽町の地に足を踏み入れた。それより田内村田口の里を過て、田かれ村の信濃屋弥平方に旅の枕をむすふとてよめる

秋ならば鹿のなく音もきかましを春の田かれの里そ淋しき

十六日の六つ時計にやとりを出て、よらぎなどいふ山路をこへつづの里へ出る

（新編磯丸全集

「草枕夢路の名残」より）

しかし、同文書の別記に宿泊したのは田口と書いていたため宿泊したのが田口か田枯村か磯丸の文章でははっきりしない。

昭和五十年、八橋（旧田枯村）の故村松貢さんと故安藤周次さんが自宅前に「秋ならば……」の歌碑を建立した。三十年あまりの時を経て、ダム水没予定地区となったためこの碑は廃棄されてしまった。

遺族の方に話を聞くと、村松

さんの家は昔「信濃屋」という屋号であったそうであるから、宿泊地は田枯村で間違いないようである。



八橋にあった「秋ならば」の歌碑

三都橋栗島公会堂の裏手にいくつかの石仏や祠が並んでいる。その中のひとつに「磯丸様」と呼ばれる小さな祠がある。高さ二十数センチで、読み取れる文字はない。ここに安置される前は栗島の上山浄水の裏手にある岩の上に祀られていた。この祠についてのいわれは、次のように伝えられている。

栗嶋村北の向の新田は、古くから竹栄寺所有の田であったが、来る年もく水不足で作人は苦労がたえなかつた。

ある年、たま〜かねてよりうわさに聞いていた歌聖磯丸翁が、田峯観音参拝の途中竹栄寺を訪れたのである。これ幸いと早速此の田に水の出る歌をお願いしますと頼んでみた。磯丸翁はしばし無言で

彼方を見ていたがやがて人のためたがやすよりもたえまなく流れ出なん田井の眞清水

と口ずさんだ。

それ以来田の用水にはきれいな水がこんくと湧出て、田も見事な稲穂を見るようになった。其徳を讃え、畦畔の大石の上に石祠を建て、磯丸様と称へ祀った。又翁のすすめに従い村中安全のため、伊良湖明神の石祠を建て、春秋二季の彼岸には、必ず祀る事としている。

（史実と伝説）熊谷丘山

このほかにも掛け軸が竹栄寺に保存されていたが、明治初期の竹栄寺廃寺の時に行方知れずになってしまったという。

磯丸は八十歳頃から作手に庵を設けてもらい、毎年伊良湖から避暑に訪れていた。また旅好きで、三河はもとより京や江戸にも足を延ばしている。このことから、実際にこの地を訪れた可能性は高い。



栗島公会堂裏の磯丸様

（設楽町文化財保護審議会委員

平松 博久）